

パンドーラ（本邦初訳・連載3）

ヘンリー・ジェイムズ
出原博明訳

フォーゲルシュタインは、以前にも、スツベン夫人が彼女の故郷をあらわすその語を発音するのを耳にして強い印象をうけたものだ。口から出たままのその発音を書き表わすとしたら、（最も近いものとして）〈なあーぶ〉ということになったであろう。が、今は、その奇妙さを殆ど気にとめていなかった。そんなことよりも、ひとりの婦人の言葉がかくも豊富でありながら、同時に、こちらの質問に答えてくれることのかくも少ないということがあり得るのを、不思議に思った。過ぎ去りしこと、または、〈なあーぶ〉のことさえも、そんなものは、彼の知ったことであろうか？ 彼は、彼女がおしゃべりをふたたび始めるようなことになるのを恐れた。気持ちを滅入らせ、どうすることもできずに、彼女を眺めた。彼は、半時間ほど前にボニイカースル夫人と向き合っていたときと殆ど同じように困惑していた。提督の未亡人が呼吸するたびに彼女の胸の上で呼吸しているようにみえる提督の肖像画を、彼は眺めた。「じゃあ、お望みなら、オールド・タイプと呼んでください」と彼は、いそいで、言った。「ぼくが知りたいのは、それがどのようなタイプであるかってことなんです！ できそうにないのですよ」彼は喘いだ。「正体を知ってことが」

「新聞で知ることができますわ。そのことで、記事がいくつも出ております。この頃は何についても書きますからね。でも、それは、デイ嬢については当たってないのです。あのお嬢さんは、いちばん旧い一族の出身ですもの。曾祖父さんは、独立戦争で戦いましたのよ」既に、パンドーラが、スツベン夫人に注意を戻していた。彼女は、もうおいとまできますよ、とほのめか

している様子だった。「あなたの曾祖父さん、独立戦争に出てらしたのではなかったかしら？」と夫人が言った。「曾祖父さんのこと、フォーゲルシュタイン伯爵に話してあげてるところなの」

「何故、あたしの先祖のこと訊くのですか？」娘は、明敏さを剥き出しにして、ドイツ人青年に答えを迫った。「ついさっき知ることができない、って言ってたのは、このことなんですか？　じゃあ、スツベン夫人が沈黙を守る気持ちになってくれさえしたら、あなたは、もう、けっして知ることはないでしょうよ」

スツベン夫人は、夢を見ているように頭を振った。「ええ、あたくしたち<なあーぶ>の者が沈黙を守るのはたやすいことですよ。あたくしたちの血のなかには、もの憂い倦怠のようなものがありましてね。それに、今は、あたくしたち、沈黙してなくてはいけないのです。でも、今夜は、あたくし、活力を発揮しなくっちゃ。あなたを、これから、ペンシルヴァニア通りの端までお連れしなければならぬのです」

パンドーラは、オットー伯爵に手をさし伸べて、また会うべきだと思ふか、と訊いた。彼は、ワシントンでは人々はいつも再会しているし、何を措いても彼女を表敬訪問するつもりだ、と答えた。ふたりの婦人は辞去するところだったが、これを耳にすると、スツベン夫人が言った。もし伯爵とデイ嬢が再会したいのであれば、ピクニックが良い機会です——あたくしがこんどの木曜日に計画しているピクニックが、と。それは、20人ほどの快活なひと達が参加することになっており、ポトマック河をくだってヴァーモント丘へ行くのだった。伯爵は、スツベン夫人が彼を参加資格があるほどに快活だとおもってくれるならば、喜んで一行に加えていただく、と答えた。夫人は、集合の時間を教えてくれた。

オットー伯爵は、皆が帰っていったあとに居残って、その理由をボニカースル夫人に告げた。後生ですから、どうか、僕が寝に帰る前に——というのは、このままではとても眠れそうにないからなのですが——パンドーラ・デイが属しているタイプとはどのようなものなのか、かんたんに教えてほしい

のです、と。

「おや、まさかあのタイプを未だ御存知なかったというんじゃないでしょうね！」とボニイカールス夫人は陽気さをとり戻して大声をだした。「今夜、ずっと何なさってらしたのです？ あなたがたドイツ人は、綿密かもしれませんわ。でも、確かに機敏ではないわねえ！」

ようやくのことで彼を気の毒におもってくれたのは、アルフレッド・ボニイカールスのほうであった。「あの女性はですね、フォーゲルシュタインさん、わたし達の偉大なアメリカの発展から生まれた一番新しい一番新鮮な果実なんです。独力で立身した女性なんですよ！」

オットー伯爵は、ちょっとの間、目を凝らした。「偉大なアメリカの革命の果実ということですか？ そういえば、スツベン夫人は、あの娘さんの曾祖父さんのことを——」が、続きの言葉は、おかしいという気持ちを抑え切れなかったボニイカールス夫人の爆笑で消された。それでも、彼は、勇敢に、いってみれば彼にとって都合のよいところに押しの一手を加えた。ホストのしてくれた定義の意味を明確にしてもらおうと、独力で立身した女性とはどういうものなのか、と訊いた。

「おすわりなさいな。とくと教えてさしあげますわ」とボニイカールス夫人は言った。「パーティのあとで、こんな風にお話するのって、好きよ。煙草お喫いになりたいのでしたら、どうぞ。アルフレッドが、もうひとつ窓を開けてくれますわ。ところで、まず、独力立身の女性というものは、新しく出てきたものなんです。でも、このことは、ご存知なんですね。第2には、あの娘さんは、ちょっとも独力立身なんかじゃないの。あたくし達皆で、助けてあげてるのよ——あたくし達、彼女に大変興味をもちましてね」

「それは、彼女が立身してからのことにすぎんじゃないか！」とアルフレッド・ボニイカールスが割り込んだ。「尤も、興味をもっているのはフォーゲルシュタインさんのほうだがね。いったいどういう訳があって、デイ嬢にそんなにも関心をもつようになったのですか？」

客人は、同じ汽船で海を渡ったという偶然によるものにすぎない、と懸命

に説明した。が、彼は、この説明が不適當だという気がした。ホスト夫妻よりもいっそう強くそれを感じた。この夫妻のほうには、彼が船上で彼女と実際に接触のあったのが極く僅かだったということも、デインジャーフィールド夫人の忠告から彼がどれほど影響を受けたかということも、同時に彼がどんなに惜しみなく観察の目を彼女に注いだかということも、知るすべがなかったのだから。彼は、30分間ほどそこにすわっていた。ワシントンの夜の暖かい静寂——夜がこんなにも静かな処は他にない——が、開けられた窓から入ってきた。それは、やわらかくて甘い土の匂い、生育するものの匂い、そして、彼の思いの中では、とりわけ、スツベン夫人の〈なあーぶ〉の匂い、そういうものと混じりあっていた。彼は、辞去する前に、あの独力立身の女性についてのすべてを話してもらった。疑いもなく、彼女は、アメリカだからこそ可能なのだ。アメリカン・ライフが彼女の道を容易にしてくれたのだ。彼女は、不身持ちでもなく、束縛から解放されているわけでもなく、無作法でも無遠慮でもない。そして、どう考えても当然そういうことになるのだが、彼女には、女山師になれるような要素は芥子粒ほどもなかった。彼女は、ただ、ひどく成功しており、その成功は、まったく個人的なものだった。社会的好機に恵まれる金持ちの家に生まれたわけではなかったのだ。彼女は、正真正銘の努力によって成功を掴んでいた。さまざま多くのしるしに拠って彼女についての判断がついた。が、主なしるし、間違いのないしるし、ということになれば、それは、両親の様子ということになる。何よりも両親を見ることによってこそ彼女の身の上が判るというものだ。そして、このような両親にこのような娘があり得たということが、ひとは、どうしても、理解できない。両親に対する彼女の態度といえ、さまざまに変化するようだ。彼女の側の大きな事実、もっと低かった社会階層から自らを上昇させたことであり、その総てを自分でやってのけたことであり、しかも、そのために自分の個性という単純な挺子を用いたということであったので、単に自分の身体を作ってくれたにすぎない者たちを彼女が目立たないようにしておくということは、予想されて当然だった。ときには、彼女の航跡に、彼女の通って

きた跡をあらわしている泡の群の中に、彼らの姿を隠れさせていた。また、アルフレッド・ポニカースルの言を借りれば、ときには、全く人目につかないように彼らを移動させた。ときには、彼らを窮屈な幽閉状態にしておいた。そして、夜陰にかくれてあらゆる用心をして、彼らに助けを求めた。ときには、前以て姿勢を整えさせておいてから、僅かにちらりと、彼らを人びとに見せた。しかし、独力立身の女性の一般的特徴は、彼女がひそかに肉親のために尽くすということはしばしば了解されたが、彼らを社会に押し付けようとは決してしなかったということである。そして、彼女の言行の中にはうんざりさせるものも無いではなかったが、その最悪の場合でも、この点では、肉親たちほどではなかったということが印象的だった。彼らは、殆どいつも重々しくもったいぶっており、大体に於て、おそろしく品行方正な感じだったのだ。彼女は、最高のものを求めるということがそうだというのではないならば、必ずしも俗物ではない。ぺこぺこしなかったし、実際よりも自分を小さくしなかった。彼女は、逆に、自分自身の立場を取り、情勢を自分のほうへ引きつけた。いうまでもなく、こんな女性は、アメリカ——競争と比較にかかわる社会階級間の限界というものがまったく存在していない国、でのみ可能なのだ。この興味深き生きものである彼女についての博物学的知識は、遂に、こうして、熱心な異邦人の前に完全にあらわにされたのである。そして、異邦人は、西方の国の香気を鼻腔に感じながら、生命の満ちた静寂の中にすわっているのだが、自分が既に推測していたことについて確信していた。つまり、この偉大な共和国の会話は、他処に於てよりも、心理学的なものであろうとして暗中模索している、とまでは言えないまでも、そうでありたいと切望していて、その程度に心理学的だ、ということについてである。彼が知った、独力立身の女性を見分けるもうひとつの手立ては、彼女の教養であった。その教養は、いささか落ち着きに欠け過ぎ、あまりにも目立つものであるようだが。このような女性は、多かれ少なかれ、読書によって社交界に入ってきているのが普通であり、その会話は、文学的言及や、更にはよく知られた引用によっても、飾られている。フォーゲルシュタインは、パン

ドーラ・デイの中にこの要素がちゃんと育成されている，ということに気付く時間がなかったのだ。が，差し向かいになった場合に彼女がそれを表に出さないようにすることは考えられないだろう，という意味のことを，アルフレッド・ボニカーズがほのめかした。これらの若い女性は例外なくヨーロッパへ行った経験をもっているということは，言を俟たない。大体，ヨーロッパが，彼女たちが第一番に行くところである。このような要領によって，彼女たちは，間々，故国でそうなるよりも前に向こうで社交界入りを果たしたのだ。同時に付け加えておくべきことは，この手段の価値がだんだん薄れてきているということである。その理由は，アメリカ社会の中でヨーロッパの威信が次第に失われてきているということであり，また，この西半球の人びとがそのような回り道について嚴重に監視するようになったからである。これらの総てがパンドーラ・デイにうまく当て嵌った——ヨーロッパへの旅，教養（船上で読んでいた書物に具体的にあらわれている），家族の追放と抹消。唯一の例外は，彼女の行進の早さだった。ランシング氏の手に残して別れてからの彼女の躍進ぶりは，アメリカ全体の異常な均質性を酌量したうえでもなお，たしかに注目に価するものだという感銘をフォーゲルシュタインは受けた。これらのことを説明するためには，彼女は自分の才気のすべてをはたらかせなければならなかったのである。彼女がユーチカから——兵站部を動員して——“移動”したとき，事実上，戦いに勝ってしまったように思われる。

次の日，オットー伯爵はスツベン夫人の邸を訪ねた。黒人の召使いが，黒人独特の話し好きな態度で，いくつかの訪問をするためと国会議事堂を見学するために，彼女たちは出掛けていったということをおしえてくれた。パンドーラがこの記念建造物をまだ詳しく実見していなかったのは明らかだ。この欠落を昨夜知ってさえいたならば，彼女の案内役を買って出ることもできたのに，と，彼は残念がった。この残念なおもいと，スツベン夫人邸の玄関を辞して自分が好い散歩をしたがっているのに気付いたこと，それゆえにペンシルヴァニア通りを辿り始めたこと，との間には，あまりにも明白す

ぎて見落とすことのできない関係があった。色いろのパラーや煙草店の並んでいる、見通しのよい長い街路の突き当たりに、幾列もの柱廊を広げるように示し、他から孤立してみえる丸屋根を支えている、あの白い巨大な建造物に到着する頃までには、彼は、もうかなり好い散歩をしたことになっていた。何故来てしまったのだろうと考えさえして、ちょっと躊躇しながら、大きな階段を、ゆっくりと登っていった。表面の理由は明白である。しかし、ビスマルク公のこの使者の動機の特質とならなければならないのは堅固というものであるのに、その理由はそれをいくぶん欠いていた。そして、その背後に本当の理由があったのだ。表面の理由というのは、スーベン夫人は訪問の用を先に済ませて——それは、おそらく、名刺を置いて帰るという程度の問題に過ぎないのだ——黄色い午後の光が無味乾燥な大理石の壁に色合いを添える時刻に、彼女の若い友人を国会議事堂へ連れていくつもりだろう、という確信を彼が抱いたということである。国会議事堂は素晴らしい建物だが、色調に欠けるところがあったのだ。パンドーラ・デイについてのフォーゲルシュタインの好奇心は、ボニカースル夫人の応接間で明らかにされたことによって、抑制されるよりも、むしろ拍車をかけられた。この人物を格付けしてもらったことで、彼は安心した。が、どのくらい巧く、言い換えれば、どれほど完璧に手際よく自己を創り得るものか、最後まで見届けたいという願望を彼は抱いた。こんなことは以前には意識していなかったのである。議事堂の下部区域を占めている、国家の歴史的出来事を記念する絵画や、上部区域を飾っている、初期アメリカの趣味をととても哀切に示している模造彫刻を眺めながら、円形大広間を、彼が、ものの10分もぶらついたら、当てにしていたあの魅力的な婦人たちが公認ガイドに案内されて姿を現わした。彼の予想は正しかったのである。彼は、彼女たちのところへ会いに行き、彼女たちを心から求めて探していたということを隠さなかった。この遭遇は、双方にとって幸運だった。彼は、彼女たちのお供をして、奇妙な果てのない内部を、がらんと佗しく延び広がっている迷路を、通り抜けて、立法と司法の広間へ入っていった。醜い場所だと思った。彼は、この総てを以前にも見

たのであり、何と愚かなことを自分はしているのだろう、と自問した。下院には、模倣した最も低級な様式の、こてこてと装飾した壁があって、それを目にすると、彼は、かすかに気分が悪くなった。まして、故人となった高名な国会議員たちの拙劣な写真で飾りたてられたロビーにいたっては、何をかいわんや、である。それは、冗談にしては大真面目であり過ぎるし、国家的英雄を祭る殿堂としては、あまりにも滑稽であった。然し、パンドーラは、それに多大の興味を抱いた。彼女は、国会議事堂をととても素晴らしいものとおもった。つまり、細部を批判するのは簡単だが、全体としてなら、これまでに観たものの中で最も感銘を与える建物だということであった。彼女は、魅力的な観光客仲間であることを身を以て示した。何らかの意見を絶えずもっていて、しかし、決してそれを口に過ぎるということがなかったのだ。つまり、案内人マチュロウニの後ろでだらだらしゃべったり、苛々させたりすることが、彼女よりも少ない人はいないのである。フォーゲルシュタインは、この女性が知性を高めようとしていることも、見てとることができた。歴史画を、異なる諸州から贈られた地方名士の奇怪な塑像——まるで、店の中で“ノブルを付けて” 区別してあるもののように、それらの大きさは違っていたが——を、彼女は眺めて、ガイドにあれこれと質問した。上院の議場では、ニューヨークからの代表の椅子を教えてくれるようにガイドに頼んだ。彼女は、その椅子のひとつに腰をおろした。尤も、スツベン夫人は彼女に、その上院議員（彼女は椅子を間違えて、他の州のところにどっかとすわったのだ）はひどい奴だ、と言ったのだが。

彼女と過ごした時間をとおして、フォーゲルシュタインは、彼女の自己形成がどのようなものか判ってくるようだった。彼らは、あとで、議事堂を取り巻いている素晴らしいテラスを、議事堂の基盤となっている大きな大理石の床を、ぶらついた。そして、ポトマック河の黄色い光沢、かすみのかかったヴァージニアの丘、遠くで反射しているアーリントンの穏やかな斜面、野暮で乱雑な外観の地域、これらのものについて、曖昧な意見——パンドーラのが最もはっきりしていたのだか——を、彼らは述べた。ワシントンは、こ

れらのものの下方に在り、多くの建物が林立して幾何学的であった。長い幾筋もの大通りが国家の未来へと延びていっているように見える。パンドーラは、オットー伯爵に、アテネへ行ったことがあるか、と訊いた。彼が勿論あると答えると、今彼らが立っている高台は、最盛期のあのアクロポリスの概念を彼に与えないかどうかを知ろうとした。フォーゲルシュタインは、この問いに満足な答えをかえすのを、次に会うときまで延ばすことにした。彼は、彼女に再び会う口実ができたこと——こんな問いをつき付けられたにもかかわらず——を、嬉しくおもった。翌日、彼は彼女と再会した。そして、スーベン夫人のピクニックは、まだ3日先だった。彼は、2度めのパンドーラ訪問を果たしたうえに、ワシントンの社交界で、毎晩彼女に会った。こんなことをほんの少し為ただけで、彼は、デインジャーフィールド夫人の警告と自分の良心の忠告——これは長い間親しんできたのだが——を自分は忘れつつあるのだな、とおもい知った。恋の危険にさらされているのだろうか？ 彼は、アメリカ娘の祭壇にいけにえとして捧げられることになるのだろうか？ 他の哀れな連中がドイツで最も高貴な血さえをも注いでいるが、彼自身は決して本気で崇拝することはすまいと誓っていた祭壇に。彼は、自分はほんとうに危険な状態にいるのではない、むしろ、自分は用心して守りを固めてしまったのだ、と結論をくださった。なるほど、自分自身の力でとても素晴らしい成功をおさめた若い女性というものは、その女性の夫にとっては、非常に役に立つかもしれない。しかし、この外交手腕のある野心家は、概して、自分の成功は自分のものであるようにしたい、と願った。妻にあと押しされているような様子になるのは、気に入らないだろう。そのような妻というものは、彼のあと押しをしたがるだろう。これが運命が彼のために取っておいてくれるものなどということ、自分に認めることは出来そうになかった——自分のキャリアに於て、あの夜大統領閣下に話しているのを彼が耳にしたように、今度は、多分、カイゼルに話そうとするような女性に、尻をひっぱたかれるなどということ。彼女は、家族との関係を断つことに同意するだろうか、それとも、なお、あのような家庭背景から造形の原版を借りることを

望むのだろうか？ 彼女の家族があまりにもひどいものだということは、ある程度、有利ではあった。何故ならば、もし彼らが今よりも少し増しだったなら、断絶の問題はもっとむつかしくなりそうだったからである。自分はこのことから安全であるにも拘わらず、というよりは、ほんとうはそれ故に、彼は、これらの問題についてあれこれ考えた。安全であるから、それは、思弁的で公平無私のものとなった。

マウント・ヴァーノンへ遠出している間も、これらの問題は彼につきまどった。この遠出は、以前から確立されている伝統に従って行われたのだが。スーベン夫人の仲間たちは、蒸気船の上に集まって茶色の大河のうえに浮かべられていた。既に、われわれのこの特別な旅人の目には、その河面があまりにも広くて岸があまりにもちっぽけであるように見えていたのだが。しかしながら、彼は、あっちこっちで、眺めるべきもののある岸に気を留めた。尤も、同時に、かつて、ノースジャーマンロイド社の汽船のデッキで、かの若い女性ともっと“寄り合う”ことになるよう工夫しなかったために、牧歌的な巡り合わせを得る好機を失ったということ意識していたのだが。ふたりは、共に、からだをそちらに向けて、アレキサンドリアに視線を注いだ。そして、パンドーラは、彼女にとってアレクザンドリアは旧ヴァージニアの絵なのだ、と言明した。何年も昔のことだが、南北戦争の時代に、この土地について絶えず耳にした、とフォーゲルシュタインに話した。彼女は、その頃は小さな子供だったが、あの繰り言の歳月の間に人びとの口の端にのぼった名前をすべて記憶していた。この歴史的地点には、古いものを、劇的な過去を、暗示するところがあり、芳醇に腐朽したもののロマンスの気味があった。アレクザンドリアの昔日の面影は、緩い傾斜で丘陵をのぼっている3、4本の短い通りの眺望にあらわれている。みすばらしい煉瓦作りの倉庫がこれらの通りに沿って立ち並んでいたが、かつて倉庫の建造を必要とした商品の出入りは途絶えてしまっていたのである。ぼろを着た黒んぼ達が朽ちていく波止場の縁から裸足の足をぶらぶらさせている、うらぶれた感じの水辺のところまで、それは、暑くて空虚で睡たげな眺めであった。パンドーラは、

国会議事堂に対するよりも、——遂に、樹木におおわれた急勾配の丘陵が河を見下ろしはじめたとき——マウント・ヴァーノンに遙かに強い興味を抱いた。彼女たちが下船して名高い大邸宅まで登っていくと、彼女は、その総ての部屋に入ってみることを主張した。彼女は、最高の状態を、彼女の言を借りれば、“その当然の権利として要求”した——彼女の言いまわしの或るものには、彼女の国民性と彼女自身のスタイルの両方の特徴を示すところがあったのだ——そして、この大邸宅を国民が大統領にカントリーハウスとして与えていないという恥について明言した。同行者たちの殆どがこの邸をもう何度も見学していたので、各自の共感に応じて庭園でカップルを組んでいた。だから、今、フォーゲルシュタインが、一行の中で最も探求心旺盛なこのメンバーに彼自身の経験したことを利益として提供してあげるのは、やさしいことだった。昼食までには、まだ1時間ほどあった。その間、オットー青年は、最初の知り合いでもあり最も魅力的でもあるこの女性と一緒に散策したのである。船上では、ポトマック河の風は少しきつかったが、今や、その河は、下界の遙か彼方に退いて単なるひとつの輝きとなっており、ゆるやかな曲線を描いている芝生のうえや、群生した木々のしたに、昼間の穏やかさのみがあり、風景全体が、高尚で温和なものとなっていた。

オットー伯爵は、大切な機会に、ちょっと冗談をいうことができる。そして、今が、そのユーモアを口にする値打ちのある機会であった。彼は、連れに向かって、ペンキを塗ったこの深みのない大邸宅は、舞台上の、模造家屋や“そで”、つまり、塗り潰したキャンバスで組み立てた建て物、に似ている、と主張した。これに対して、彼女は、かつてドイツで見たことのある、陶磁製のストーヴと剥製の鳥だけしか置かれていない、つましい館の幾つかを例にあげて、あまりにも手際よく反論したので、彼は、ワシントン邸が^{ゲミュートリツヒ}心地よいものであることを認めざるを得なかった。実際に心地よいと彼が気付いたものは、その昼間のやわらかな感触であり、自分の個人的な状況であり、サスペンスの楽しさであった。というのは、サスペンスは、決定的に彼に割り当てられたもち分となっていたからである。彼は、自分自身の人生を

見つめている、そして自分の鋭敏な感情を制御できなくなっている、そういう魅力に捉えられていたのだ。時移るにつれて事態が変り、それまでとはとても違った状況になるかも知れないということが意識に懸かっていた。その変化がどのようなものになるのだろうかと思うと、心臓の鼓動が確かに少し早くなった。芳しい四月の日々、何故、彼は、自分を深みへ導くかもしれないアメリカ女性たちと共にピクニックにやって来たのだろうか？ このようなアメリカ娘たちというものは、ポメラニヤの伯爵との結婚を喜ばないでいられるだろうか？ そして、彼女たちは、やはり、あんな調子で、カイゼルと話をするのだろうか？ 若しも彼女たちのひとりと結婚するということがなれば、徹底的なレッスンをしてやらねばならないだろう。

この邸宅のちょっとした観光では、われわれの青年と彼の連れには、沢山の同行者がいた。その人たちもまた蒸気船で来たのであって、それまでこのふたりに願わしいプライヴァシーを与えてはくれなかった。が、次第に、その人達が散っていった。人々が困んだ、委任されたガイドは、芸人のようであった。ふさふさと顎髭を生やした男であり、大柄で、おっとりして、愛想がよく、俗っぽかった。気まぐれな、教化するような、恩着せがましいような話し方だった。その話し方は、彼が、あっちこちに立ち止まって聞かせどころを述べるとき、大変効果をあげた——耳を傾けている人群れに視線を泳がせ、人びとの頭上の宙に、考えに耽っているような様子で視線を留めて、それから、まるで、突然のインスピレーションでもあるかのように、古臭い冗談を口にするのだった。彼は、^{バーテル・バートリアエ} 国父の墓を訪れたときでさえ、それを、田舎の定期市の露店の前でする弁舌の模倣のような、愉快的話にした。墓は、構内のほら穴のような処に祭られていた。そして、フォーゲルシュタインは、この男はこの仕事に向いてはいるが、あまりにも慣れ慣れしくし過ぎている、とパンドーラに言った。「ああ、あの男はワシントンさんと親しくしたことだったでしょうよ」と、彼女は、ぴりっと、そっけなく、言った。彼女は、しばしば、こんな調子で面白いことを言っているのだったが。フォーゲルシュタインは、ちょっとのあいだ、彼女を眺めた。そして、歴史という

ものが無遠慮な扱いをすることの最も少なかった英雄によってさえもこの女性はどうもどぎまぎさせられることはなかつただろう、という思いを抱いて微笑んだ。「あなたは、どうにも信じられそうにない、って顔してるわ」パンドーラは続けた。「あなた方ドイツ人は、そんなふうには、いつも、偉い人物たちを畏れるのね」素晴らしく新鮮で自然な彼女の態度を、結局は、ワシントンは好むことになったことだろう、と彼はふと思った。顎髭の男は、アメリカの聖地に仕えるには理想的な聖職者だった。彼は、小さな一行の好奇心を達人の手際よさで利用した。適時に彼らを連れ出して古典的な氷室を見せた。そこでは年取った婦人がそれをワシントンの墓だと信じて泣いていたのだった。この記念物が吟味されている間、われわれの興味深いふたり連れは邸を独占していた。ふたりは、2階の幾つかの窓がそちらに向いて開いている奇麗なテラスで、ひとときを過ごした——それは、巨きな河の流れ、趣きのある植え込み、そして、囲い垣根と遺物となった果樹格子垣のある前世紀の庭園など、から成る雄大な景色全体のうえに、やや斜めに突き出している、屋根のない小さなヴェランダのようなものであった。ふたりは、半時間近く、ここでぶらぶらした。フォーゲルシュタインが、その魅力に自分は心を奪われているわけではないのだと自分を納得させることのできなかつた若い女性との親しい会話に、邪魔されないで取り組むことを楽しんだのは、他ならぬ、この離れた場所に於てだった。その役は、自分に割り当てられているようにもおもえた。その対話を再現することは、必要ではないし、また、できないことでもある。が、その対話の始まりは、——ふたりがテラスの手摺に凭れて、遠くから漂ってくる案内人の陽気な声を聞きながら——大西洋を渡っていたときにもっと一緒に話をしたかつたのが何故なのか理解できない、と彼が突如として彼女に言ったことであつた。

「あら、あたしには判ってますわ、あなたに判らなくても」とパンドーラは、言った。「話しかけてくだされば、あたしのほうは、直ちにお相手しましたわ。最初に声をかけたのは、あたしですもの」

「ええ、覚えています」——彼は、落ち着かない気分になった。

「あなたは、デインジャーフィールド夫人のいうことにあまりにも耳を傾けすぎましたわ」

彼は、よく判らないという振りをした。「デインジャーフィールド夫人？」

「あなたがいつも隣り合って座っていたあのご婦人よ。あの方は、あなたに、あたしと口を利かないように、って言いましたわ。あたし、ニューヨークで彼女と会いましたの。今では、彼女のほうから、あたしに話しかけてくるのよ。あのひと、あなたに、あたしとは関わりをもたないように、って忠告したのですわ」

「ああ、どうして、そんなひどいことをおっしゃるのですか？」オットー伯爵は声を大きくしたが、心の内をあらわして赤くなっていた。

「あなたは、これを否定できないってこと、ご自分で判ってるのですわ。あなたは、あたしの家族が気に入らなかったのよ。判れば、魅力的な人たちですのにね。あたしは、家庭にいるときがいちばん楽しいのですもの」娘は忠誠心を示して言葉をつづけた。「でも、こんなことがどうしたっていの？あたしの家族は、とっても幸せよ。あのひと達、ニューヨークにうまく慣れてきておりますわ。デインジャーフィールド夫人は、来冬、あたしを訪問するの——俗物の恥知らずです」

「あなたは、ぼくが会ったことのあるどのような女性とも違っています——あなたを理解することができないのです」フォーゲルシュタインは、顔を赤らめたまま、言った。

「そうね、あなたがあたしを理解するなんてことは、決して起こりえないのですわ——おそらく。でも、それが何か問題になりまして？」

彼は、どのような問題があるかを説明しようとした。が、ここでそれに付き合うスペースの余裕がない。ドイツ人が物事を説明しようとするとき、彼の頭脳はそれらを単純化するとはかぎらないということが知られている。そして、パンドーラは、伯爵が明らかにした意外な事実の幾つかに、はじめは、当惑したが、次いで、それを面白がった。挙げ句のはてに、彼女はいささか怯えた、とわたしはおもう。なぜなら、昼食の用意ができてるでしょうし、

あたし達もスーベン夫人とご一緒しなければなりませんわ、と、唐突に、ある決意を示すように、彼女が言ったからである。邸を離れるとき、彼女の相手は故意に歩調を遅くした。この女性を失うのだな、という漠然とした感じが彼を苦しめていたのである。

「それで、ワシントンには、まだ長く滞在していただけるのでしょうか？」歩きながら、彼は、懇願するように訊いた。

「まったく、情況次第ですわ。大切なニュースを待っているところですよ。どうするかってことは、そのニュース次第ということになりそうですわ」

この、ニュースを待っていることに就いての言い方から——それに、大切な、などと！——ともかく、彼女がキャリアもちの女性であり、活動的で自立している、という印象を彼は受けた。だから、進んでいく彼女を立ち止まらせるという望みを抱くことはできなかった。彼が彼女のような女性を見たことがなかったというのは、確かに本当であった。ただ、この女性が大統領にしていたあの頼みごとは冗談なのだろう、——ボニイカーズル夫人と話し合ったあとの沈思黙考の中で——と、そんな判断を若し下していなかったならば、彼女が待っているニュースというものがあの頼みごとのことを指しているのだということに、彼は気付いたことだったのであろうけれど。この女性が彼に話したことには、気持ちをくじくような、いくらか興をさませるようなところがあった。にも拘わらず、あなたがワシントンに滞在しておられる間、尊敬の念をこめた心尽くしをさせてもらってもいいだろうか、と彼女に訊いたとき、彼の気持ちに熱情のようなものが無いわけではなかったのである。

「お好きなだけ——それだけ尊敬の気持ちのこもったのをね。でも、いつまでもそんな風に、というわけにはいかないわ！」

「ぼくに辛いおもいをさせようとなさる」とオットー伯爵は言った。

彼女は、間を置いてから、説明した。「家族の誰かがくることになるかもしれない、って意味なの」

「あの方たちと再会できれば、ぼくは嬉しいですよ」

彼女は、また、ちょっとの間黙っていた。「お会いになったことのない者もおりますのよ」

午後、蒸気船でワシントンへ帰っていく途中、フォーゲルシュタインは警告を受けた。ボニイカーズ夫人から、だった。にこやかに彼と一緒に航行しているときに、奇しくも、この世話好きな異性の友人は、パンドーラ・デイについて2度目の助言を彼にすることになったのである。

「この前の夜、独力で立身した女性について言い忘れていたことが、ひとつありますわ」と無際限に陽気な婦人は言った。「それはね、大抵の場合、背景のどっかに障害になるものがあるのですから、こういう女性にあなたの愛情を向けるのは、決して安全なことではない、ってことなの」

彼は、疑いの目で相手を眺めたが、微笑んで、言った。「障害と仰る意味が判れば、あなたが教えてくれたこと——そのことについては、とても感謝しているのですが——を、ぼくは、もっとよく理解できるとおもうのですが」

「ああ、それは、もっと前の時期に知り合った青年と、ずっと婚約しているって意味なんです」

「もっと前の段階といいますと？」

「こんな風になる前の時期——彼女が自分の力にまだ気付いていなかった頃のことです。そうねえ、例えば、ユーチカ出身の青年と、ということになりますね。そういう場合のふたりは、普通、待たなければなりません。おそらく、その青年は商店勤めでしょう。永い婚約ですわ」

オットー伯爵は、できるだけ理解できないほうがよいと思った。「婚約が——効力を得るのに、ということですか？」

「あたしは、ドイツ風の夢想的なことは何も言ってるのではありません。結局、永く待ったあとでは、あまりにも満足感にみちて遂行されることになる——あの、奇妙にアメリカ風の企画、早すぎる婚約、のことなんですよ」

この興味深い概括が自分にとっては何の意味もないという風に振る舞うことが出来ないのであれば、彼が外交官の職業に就いたのは無駄である、と

フォーゲルシュタインが考えたのは、じつに正しいことであった。更に、彼が、若しボニカースル夫人が彼をたじろがせてやろうとおもっているのであれば、その問題を扱うのに、これほども軽はずみなやり方はしなかつたらう、と信じたのは、夫人に対する正しい評価だった。他のあらゆることと同じく、このことの総ては、単に、彼女の笑いの対象だったのである。更に、善意の表われであったのだ。「分かりました、分かりました——自助立身の女性には、常に過去があるってことでしょう。そうなんです。そして、ユーチカ出身の——商店で働いているその青年は——彼女の過去の一部である」

「完璧に表現してくださいましたわ」とボニカースル夫人は言った。「とても、それ以上の言い方は、わたくし、できませんわ」

「しかし、この若い女性の場合のように、現在と未来が変わると、その変化に応じて、他のこと総てが変わるとおもうのですが。アメリカでは、どういう風に言うのでしたっけ？ 彼女が彼をおろそかにする、とか」

「全然言いませんわ、そんなこと！」ボニカースル夫人は、声を大きくした。「あの娘さんは、そのようなことは全くしません。あなたは、彼女をどのような人物だとおもっているのですか？ 彼女は、彼を捨てたりはしません。少なくとも、わたくし達は、そのように期待しております」夫人は、保証を弱めるように、付け加えた。「お話しましたように、このタイプは新しいものですし、まだ考慮中のケースなのです。完璧な研究をするのには、なお、もっと時間をかけなければならないのですわ」

「いや、もちろん、ぼくは、彼女がその青年を捨てたりしないよう、望んでおります」とフォーゲルシュタインは、簡単に言明した。心を少しかき乱されたときはいつもそうなるのだが、ドイツ語訛りのアクセントがいっそう露骨に出ていた。

以降の航行の間じゅう、彼は、どうも落ち着かなかつた。帰る途中のピクニック参加者たちと殆ど言葉を交わすこともなく、船のあっちこっちをさ迷った。船がワシントンに近づき、宙吊りにされた雪玉のように簡素に、議事堂

の白いドームが、前方の空中に懸かって見えるようになって、航行の終わりが迫ってきたとき、彼は、自分が、デッキの上で、スツベン夫人の近くに身を置いているのに、ふと、気付いた。彼は、彼女の寛大さのお蔭で催しに参加させてもらっておきながら、ずっと夫人をなおざりにしてきた、ということ自分で責めた。その欠落を、正しい敬意を示すことによって修復しようとした。が、彼の頭に浮かんだ、敬意を示す唯一の行為は、デイ嬢が、夫人の知るところでは、婚約しているかどうかということ、偶然でもあるかのように訊くことであった。

スツベン夫人は、南部人特有の目に、殆どロマンチックともいえそうな同情のまなざしを浮かべて、彼をじっと見返した。「あたくしの知るところでは、ですって？ そりゃあ、勿論、存じておきましょうよ！ あなたもご存知だとばかりおもってましたのに。婚約してるってこと、ご存知なかったのですか？ だって、16歳のときからずっと婚約しておりますのよ」

オットー伯爵は、議事堂のドームを見詰めた。「ユーチカ出身の紳士と、ですか？」

「ええ、故郷の方ですわ。その方がもうすぐ来られるのを、彼女は待っているのです」

「それを聞いて、ぼくは、とっても嬉しい気持ちです」とフォーゲルシュタイン。こんなことが言えるとは、外交官としてのキャリアに於て彼は、間違いなく、有望なのだった。「それで、彼と結婚するのですか？」

「まあ、じゃあ、何の為に、ひとは互いに恋におちるのですか？ 彼女の準備が整ったら、ふたりは結婚するとおもいます。ああ、あの娘さんが、＜なあーぶ＞の出身であってくれさえしたら——！」

これを、彼は、急いで遮った。「しかし、何故、こんなにも長い年月の間、ふたりは式を挙げなかったのですか？」

「そうねえ、まず、彼女が若過ぎたってことね。それから、彼女が、家族にヨーロッパを観せておきたい、と考えたので——勿論、彼女と一緒にすればこそより良い見学ができるわけですから——彼女たちは、向こうで暫く過ご

したのです。それからね、ベラミーさんのほうは、商売のうえて困難な問題にぶつかって、その頃は結婚したくないような気持ちになったのですわ。でも、彼は仕事をやめてしましましてね、お察ししますところ、ずっと自由な気持ちになったのでしょう。もう、永かったってことは確かです。でも、この永い間、ずっと婚約していたのですよ。ツルー、ツルー・ラブなのね」とスツベン夫人は言った。ツルーという形容詞の発音は、かすかな音色のフルートを吹いているようだった。

「その方の名前は、ミスター・ベラミーですか？」公爵は、つき纏い続けてきた記憶を頭に浮かべて、訊いた。「D. F. ベラミー、ですね？ 商店の仕事をしていたという？」

「どのようなお仕事だったかは、存じません。何か、ユーチカでのお仕事でした。ニューヨークに支店を出してた、と思います。ユーチカの指導的立場の紳士のひとりで、とても高い教育を受けておりますのよ。デイ嬢とは、ずっと離れて年上でしてね。とっても立派な方で——学士さんのはずですわ。ユーチカで、非常に高く評価されてましてよ。どうして、疑ってらっしゃるような様子をあなたがなさるのか、あたくし、判りませんわ」

フォーゲルシュタインは、何も疑ってはいない、と強く言った。そして、確かに、夫人が話したことは、彼にはあまりにも奇妙におもえるのでかえってそれだけ信用できそうなふしもあるのだった。ベラミーというのは、一年半前に、ドイツ汽船が到着した時パンドーラと会うことになっていた紳士の名前であった。彼女が、あんなに感情をほとぼしらせて、ベラミーの友人に話し掛けたのも、将にベラミーの名に於てだったのだ。友人というのは、彼女の母親の古い衣服類を手探りしようとしていた麦藁帽子の男のことなのだが。これが、彼女の矛盾の絵に仕上げをする事実であるように、オットー伯爵には思われた。そして、その絵は、今や、完成するための加筆は必要としなかった。その絵は、なおも、将に彼の目の前に懸かっている、彼の心を奪いつづけた。彼は、周囲の物事から切り離され、まるで転倒した乗り物から投げ出されたかのような感じを少し抱きながら、その絵を凝視していた。そ

して、スーベン夫人の一行が下船することになっている埠頭から突き出た堆積物のひとつに船が衝突したときに、やっと、われに返った。蒸気船を埠頭に合わせて横づけにするのに、幾らか手間取った。その間に、乗船客たちは、舷側ごしにその成り行きを眺め、出迎えに集まっている人たちの様子から、それぞれの楽しみを引き出した。黒んぼやのらくら者や貸し馬車の御者、それに、得体の知れないひと達もいて、彼らは、顎に房髭を垂らしていたり、爪楊枝をくわえていたり、手をポケットに突っ込んでいたり、口をもぐもぐ動かしていたり、ワイシャツの胸にダイヤの飾りピンを付けていたり、という具合であった。そして、彼らは、ホテルのポルチコやサロンの出入り口でさまざまな斜の姿勢で刻を過ごすことをやめて、半時間ばかり退屈を紛らすために、ペンシルヴァニア通りからぶらぶらとやって来た、というような感じだった。

「まあ、嬉しい！ 来てくださるなんて、何て嬉しいでしょう！」と言ったのは、オットー伯爵の肩近くの声であった。彼は、それが誰の口からのものであるかを知るためにそちらに顔を向ける必要はなかった。その声は、その日の大半の時間、彼の耳に聞こえていたのだ。尤も、彼に対しては、その声に可能な最高の表現の豊かさを示してはいなかった、ということが今判ったのだが。まして、その声が誰に向かって放たれているかを見出すために、そちらを向かなければならないということは更になかった。というのは、ここにそのままを記した単純で僅かな言葉は、次第に狭まっていく水面ごしに投げられたのであり、われわれの青年は見えていなかったのだが、埠頭の縁まで進み出てきていた紳士が、間髪をいれずに返事を投げかえしたからである。

「3時の列車で着いたんだよ。K通りで、君が何処かってこと聞いたので、迎えにこようと思ったんだ」

「お気遣い、嬉しいわ！」とパンドーラは言い、いつも一座の皆を引き込んでしまうようにおもわれるあの笑い声をあげた。尤も、このあと暫くの間、彼女と相手は目だけで会話をつづけている様子だったのだが。一方、フォー

ゲルシュタインの目も怠けていたわけではなかった。彼は、彼女を訪ねてきた男の頭から足までを眺めた。自分がすぐ近くに居ることに彼女が全く気付いていないのが判った。目前の紳士は、長身で、ハンサムで、身なりが立派だった。埠頭に立っている有様から判断して、明らかに、彼は、ユーチカのみならず、情況次第で就かなければならなくなるかもしれない如何なる地位に於ても、見栄えがするだろう。40歳ぐらいだった。黒い口髭をたくわえている。彼は、カウンターのような広々としたものの向こう側から世間の人びとを眺めて、そこへ、先ず、交渉条件の考えを記すことを、慎重に愛想よく求めている、という風であった。「ほんとにまあ、ぐずぐずしていることったら！」とパンドーラが叫んだとき、彼女の辛抱を要請するかのように、彼は、手袋の手を振った。彼女は、数秒辛抱した。それから、何かニュースがあるか彼に訊いた。彼は、黙って微笑みながら、ちょっとの間、彼女を見た。そのあとで、彼は、公式のものらしい封印の付いた大きな手紙をポケットから取り出して、おどけて、頭上でひらひらさせた。この行為は、控えめに窃かになされた。どの位のことが起きているかということに気付いているのは、われわれの青年以外には誰もいないようだ——そして、気の毒なオットー伯爵は、おもに気配の中にそれを感じとっていたのだ。船は、波止場に触れていた。対のふたりの間隔は、僅かなものになった。「国務省？」パンドーラは、とても可愛いらしくもの静かに、相手に向かって口を動かした。

「そういう風に呼ばれてるところだよ」

「それで、どこの国なの？」

「オランダ人をどう思う？」紳士は、答えを求めた。

「ぜったい、すばらしいわ！」パンドーラは、声を大きくした。

「じゃあ、往復旅行を楽しみにしてしてくれる？」と紳士は言った。

われわれの傷ついた青年は、ずっと沈黙していたが、ここで、背を向けた。やがて、スツベン夫人と彼女の友人は一緒に下船した。夫人がデイ嬢と一緒に馬車の中に入ると、この娘と話をしていた紳士も、つづいて乗った。他のひと達は、散っていった。ポニイカースル夫人が彼女の馬車に“乗せて”

くれると言ってくれたのを丁重に断わって、フォーゲルシュタインは、一人で深く考え込みながら、歩いて帰った。2日後、オランダ派遣の公使の職にユーチカのD. F. ベラミー氏を大統領が任命したということが新聞に公表されているのを読んだ。それからの1か月の間に、パンドーラが、他の沢山の為すべきことを為し終えてから、遂に、彼女自身の結婚式の祭壇に“辿り着いた”ということを知り、スツベン夫人から知らされた。彼は、このニュースをボニーカーズル夫人に伝えたが、夫人は、そのことを未だ耳にしていなかった。彼女は、その時の彼の奇妙な表情を目にすると甲高い声で笑い、さあ、これで、独立立身の若い女性について新しい帰納的結論をだすための根拠が手に入ったのよ、と言った。

(おわり)

Note : Text は、*The New York Edition of Henry James* (Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1971) の第18巻に拠った。

(1990. 9. 28 受理)